



## 私 の 幼 稚 園

水 島 さ ゆ り

### —猫の巻—

園長 緑側で新聞を読んでゐる。時雄傍の小さな

ちやぶ臺に寄つて、しきりに繪をかいてゐる。小

春の陽にいくつしまれて、縁先のちっぽけな躄

躅が、赤い蕾をちょこん／＼と三つ出してゐる。

園長 時雄の繪を覗いて見る。蓄音機ピクターの  
廣告——犬がレコードから出る妙音に感じ入つてゐ  
る繪の敷寫が進行してゐる。犬の顔が薩摩芋のや  
う。園長をかしさを悟へて、眼を新聞に移す。

時雄「水島さん、犬はほんとに蓄音機が好き？」  
時雄「好きですとも、ほう此の大だつて好きで  
たまらないから、こんなに聞いてゐるんです  
よ。」

時雄「猫？ さあ、やつぱり好きでせうね。」  
園長「猫？ さあ、やつぱり好きでせうね。」

時雄「水島さん、あそこにトラ公が寝てゐるよ。」

鍵の手になつた三疊の板庇の上で、トラ公が暖  
い陽の光を占領して、紫外線を全身に浴び、心地

よいに眠つてゐる。園長バンバンと手を拍つ。ト  
ラ公氣附かず居る。園長大きく、「トラ公！」と  
呼ぶ。トラ公頭を撞げてこちらを視る。

園長「時雄さん、トラ公に何か歌つて聽かせませ

時雄「蓄音機をやるといゝね。」

園長「さうね、今蓄音機がないから、時雄さんの

歌がいゝのよ。」

時雄「うん、何がいゝ?」

園長「しやぼん玉がいゝでせう。」

時雄しやぼん玉を歌ひ出す。

しやぼん玉飛んだ、屋根まで飛んだ、屋根ま

で飛んで、こはれて消えた。風々吹くな、し

やぼん玉飛ばそ。」

トラ公頭を下げて眠つてしまふ。

時雄「だめだよ、ちつとも聞いてないんだもの。」

園長「ようし、ぢやあ水島さんが歌つてみやう

ね。」

園長軒先の物干竿の先で、板庇の裏をトントン

と軽くたたく。トラ公驚いて頭を上げる。園長も

もむろに、シユーベルトの子守唄を歌ひ出す。

ねむれー ねむれー

トラ公けげんさうな顔をする。

屋根のううへへーにー

こゝまで歌つてトラ公の顔色に注意して見る。  
トラ公ウフンと言つて、青天井を向いてしまふ。

これはいけない、今度はと、「からたちの花」を

歌ひ出す。

からたちの花が咲いたよう一

とやつて見る。感じない様だ。

からたちの實は黄いろだよう一

とやつたが、まだ感じない。一段と咽喉を柔くし

て、

からたちのそばで泣いたよう一

とやると、大きな口を開け、八方へつん出た髭の

先を踊らせて、アツハハハハと咲笑したやう

だ。

園長むつとする。ちやぶ臺の上に在る時雄の椿

の實を一つ採るや否や、トラ公目がけて投げつけ

た。ポンと板庇を打つて跳ね返つて来る。チエツ

今度は柄杓手洗鉢の水をすくつて、ざんぶとひつ

かける。水は日光にきらめき、抛物線を描いて屋根を濡らす。

トラ公不精無性立上つて、「ち活潑ぢやて、わたくしや若いんだがね、ちめえ様だよ冷水に御用心は」とばかり、のそり／＼歩いて行く。園長くやしがる。

園長「トラ公はだめ／＼。もう絶交だ。」

書齋から友人名簿を持出して来て、

「北隣ちきせ婆さん愛猫トラン公」

とある上へ、萬年筆で太い棒を何本も引ばつてしまふ。

時雄「水島さん、どうする。」

園長「トラン公ともう遊ばないのよ。もう日向ぼっこさせてやらないの。」

時雄「なぜ？トラン公が困るぢやがないの？トラン公は此の屋根が一番好きだから。」

園長「いけない／＼、トラン公はわるいから、今度

來たらバケツの水をぶつかけるのよ。」

時雄「可哀さうだね。」

園長硯箱と半紙を持出して来る。

オマヘハ ワタシノウタヲ キカナイカラ  
モウオトモダチデハアリマセン。

トランコウ

エントチャウ

と認める。時雄拾ひ讀をする。

園長「時雄さん、これトラン公に持つて行つて、讀

んでやつて下さい。」

時雄「いやだなあ、トラン公をいぢめるんだもの。」

園長「トラン公がいけないんですよ。まあ持つて行つて、讀んでやつて。」

時雄「いや」

園長「ぢや此處へ貼出して置きませう。」

園長半紙を三疊の障子の表へ貼出しておく。

\* \* \* \*

園長「時雄さん、唯今。」

時雄「お歸りなさい。」

園長「面白い雑誌を借りて來ましたよ。讀むから  
いらっしゃい。」

時雄「ああん、い、な、い、な。」  
園長のうちの茶の間、二人火鉢の側へ寄つて坐  
る。

園長「ね、動物と音樂つて言ふ所を読みますよ。  
時雄「英語なんかわからないよ。」

園長「日本語に直して読みますよ。さあ聽いてら  
つしやい。」

園長ほがらかな聲で讀出す。

此の間ニユーヨークの動物園で、動物に音樂を  
聞かせました。六十何人の大勢の人が樂隊を  
やつたのです。一番始めは、ツウステップと言  
ふ、踊る時の樂隊でした。

此の大變な樂隊を、象も聽きました。ライオン  
も聽きました。狼も聽きました。虎も聽きました。  
熊も聽きました。皆さん、之等の猛獸が樂  
隊を聽いてどうしたと思ひますか。象はと言ふ

と、あの長い鼻を、ぶらり／＼振つて、のつそ  
＼＼と歩き廻りました。歩き廻つてゐるうち  
に、あのちいちやいお眼々から、ボタリ／＼と  
涙を出しました。象クンは可愛いね。  
今度はライオン。牡のライオンが二匹、どちら  
も肉の塊を食べかけてゐましたが、チララ、テ  
ララと大へん面白い樂隊が始まると、食べるの  
を止めてしまひました。そして、ぢいつと聽い  
てゐました。

狼と虎は、あまりいゝ音がするので、眼をつぶ  
つてしまひました。そしていゝ心持になつてしまひました。

熊サンは後の足で立あがつて、ビヨコボン、テ  
ララ、ビヨコボン、チララと踊り出しました。  
樂隊が今度はシュトラスのワルツと言ふ、これ  
も踊りを踊る時のをやり出しました。チララン、  
チラランと大層愉快な樂隊です。あまり氣持の  
よい樂隊を聽いたので、熊サンが眠つてしまひ  
ました。虎も眠つてしまひました。狼も眠つて

しまひました。二匹のライオンも眠つてしまひました。象クンも眠つてしまひました。皆ぐつ

すり眠つてしまつて、樂隊だけが、チララン、チラランと愉快な歌を歌つてゐました。

それが済むと、今度はショパンのフェネラルマ

ーチと言ふのを始めました。これはもとむらひの時の悲しい樂隊です、此の悲しい樂隊が始まると、象クンも、ライオンも、熊サンも、狼も虎も、悲しさうな聲を出して、ウオーラ、ウオーリ

と唸り出しました。

此の次には子犬を連れて来て、ピアノを弾いて

聽かせました。トルコマーチと言ふので、タカタン、タカタンとやると、子犬が大變嬉しがつて跳ね廻りました。子猫にもピアノを弾いて聽

かせました。第九シンボニーのフヒナレと言ふ

大層立派な音樂を聽かせてやりました。すると子猫はすつかり感心してしまつて、眼を糸のやうに細くしてしまひましたとさ。これでおしまひ。

時雄「ああ面白かつた。時雄だつて樂隊大好きだよ。」

園長「水島さんも大好き、猫も好きね。」

時雄「うん。猫樂隊好きだね。水島さんの歌なん

かつまらないや。」

園長「アハハハハハハぢやあトロ公も樂隊なら感心するの？」

時雄「うん感心するよ。」

園長「ぢやあ水島さんが悪かつた。トロ公と仲直りしませう。」

時雄「仲直りつてどうするの？」

園長「晩にお魚の骨やるの、それからあした日向ぼっこに來ても水かけないの。」

時雄「仲好になるの。」

園長「さう、又お友達になるのよ。」

シャン、シャン、シャン、オシャシャのシャン。と園長手打をする。猫の額程の庭に一本の紅葉、夕陽に映えてあか／＼と照る。トロ公無表情な顔附で板屏の外を素通りする。